

# アプリケーション開発による更なる観光誘致と持続可能な地域経営 ～消滅可能性都市から持続可能な地域へ～

団体名●川澄ゼミナール／代表者名●安田智美（経済学部経営学科3年）

## はじめに

増田レポート(2014)によれば、2010年から2040年にかけて、人口の再生産力が5割以下に減少する市区町村、すなわち消滅可能性都市は現在、全国の自治体の49.8%を占めている。石川県でも消滅可能性都市に選定されている地域が5市4町あり、その中でも4市4町を能登が占めており、能登は現在、存続が難しい地域となっている。全国的な問題でもある人口流出や少子高齢化が年々進行し、人、土地、ムラの3つの空洞化に直面することで、集落機能の低下、地域資源の有用性が無くなり、地域が消滅してしまう可能性がある。それにより、農村と都市域の補完関係を保つことができなくなり、都市域に不足している農村の強い地縁や、地域資源が失われ、若者は都会に住むという選択肢しかなくなる。そこで若い世代へ地域の良さ、能登の魅力の多さを伝えることでそれを再確認してもらい、次世代を担う若者の選択肢を広げることを目的とした。

そして今回、私たちが考案したのがアプリケーションの開発だ。既存の情報冊子「ぶらり能登」と提携した若者向けアプリケーションである。このアプリケーションでは、能登のバーチャル観光と能登商品のネットショッピング、ぶらり能登に掲載されている店舗情報や観光スポットの位置情報の閲覧、アプリケーション利用者の能登での宿泊・飲食店・レンタカーなどの割引サービス等の様々なサービスが受けられる。能登には美しい景観や世界農業遺産に認定されているが、これらの認知度は非常に低い。このアプリケーションによって、まだ知られていない能登の魅力を発信することで、若い世代に能登に興味を持ってもらおうと考案した。

## 活動内容

M-BIP の出場を決めてから、まず提案アイデアの企画書の作成を行った。企画書は、提案名、概要、提案背景、商品・サービスの内容、特徴(優位性)、ターゲット、プロモーション戦略、成功するために必要なこと、アピール(将来性)という内容で構成されてお

り、各項目の内容をメンバー5人で話し合いを重ね決定した。また、コロナウイルス感染拡大の影響により、メンバーと集まれる機会が少なかったため、通話などでも話し合いを進めた。しかし、初めに考えた提案アイデアの実現可能性は低く、この提案内容ではファイナリストに残ることができないと判断したため、提案内容の変更に至った。より実現可能性を高めるため、実現した時の様々な想定をし、内容を充実させることを徹底した。そして、幸いなことにその提案内容が評価され、ファイナリストに残ることができた。

ファイナリストに決まった後の活動として、最終審査のプレゼンテーションとパネル展示に向け、より多くの方々に興味関心を持ってもらえるようプレゼンテーションの練習や資料作りに励んだ。具体的なプレゼンテーションの練習として、メモなどを見ながら話すのではなく、目を見て話すことを意識した。私たちの提案をより理解してもらえるよう、まずはメンバー全員と川澄先生が理解できるような発表を心掛けた。そして、プレゼンテーションにおける修正点を見つけるために第三者の方に聞いてもらい、発表の感想のフィードバックを受けた。第三者からのフィードバックを意識し、発表の仕方を改善した。プレゼンテーション時や本番会場で持ち前の明るさを存分に発揮できるよう、メンバー全員で自信をもって挑むため練習を何度も重ねた。

ポスター作成では、見てすぐに情報が伝わるよう、要点を大きく3つに分け、図で表現し、それだけでは伝えきれないことは、ひとことで伝える言葉を添えたりすることを意識して作成した。しかし、伝えられる情報量に限りがあるため、1枚に簡潔にまとめることは容易ではなかった。そのため、過去にM-BIPに出場した先輩方のポスターを参考にし、メンバーで話し合って作成を進めたことで、より見やすいポスターを作成することができたのではと思う。また、パネル展示においても、聞いてくださる方に伝わりやすいよう内容のすり合わせを行い、笑顔ではきはきと話すことを意識して練習を行った。

ファイナリストに決まってからは、限られた時間の中で初めて聞いてくださる方々に少しでも興味を持ってもらい、私たちの提案を理解し賛同してもらえるようなプレゼンテーションやポスターを作ることをより意識して活動に励んだ。

## 成果、結果の考察

私たちの提案した「アプリケーション開発による更なる観光誘致と持続可能な地域経営」は、1次審査と2次審査を通過し、ファイナリストとしてM-BIP最終審査でのプレゼンテーションと他のM-BIP入選者20団体とともにパネル展示に臨んだ。そして、当該のビジネスプランは、ISICO賞、テレコムサービス協会賞、オーディエンス賞を獲得した(写真参照)。オーディエンス賞は、その会場で参加者投票を行い投票が多かった提案に送られる賞の事である。この賞を頂けたことはとても光栄なことであると感じている。当日私たちは商品のパネルの前に立ち様々な企業の方に積極的に声をかけ商品のアピールをした。その結果が賞となって返ってきて、私たちの誠意や意思がしっかりと会場の方に伝わったのだと実感した。また、他二つのISICO賞とテレコムサービス協会賞はそれぞれ審査員一人ひとりが1つ商品を選び送られる賞の事だ。他には最優秀賞、優秀賞と賞があるが、これらの賞の1番の決め手となったのは実現可能性にあると思う。最優秀賞や優秀賞に選ばれていた商品は、すでに商品が完成されており実験済みのものやどのような効果が得られよう商品化していくかが明確なものばかりだった。私たちの商品が2つもの賞を獲得できたのも、アプリの内容を詳しく明確に紹介し、開発自体は行政に頼るなど実現がどれだけ可能かをアピール出来ていたことにあると思う。また、逆に最優秀賞や優秀賞を逃したのも、最優秀賞や優秀賞の提案に比べ私たちの提案は商品をどのようにシステム化し、利益をどう得ていくのか実験不足で、あくまで想像のうちに過ぎない段階であったことが理由であると感じる。理系の学生の商品は、普段からの実験や検証によって商品

にどのような利益があるのか明確で感心するものが多かったように感じた。しかし、提案段階である私たちの提案が評価を受けたのは、現実可能性はもちろんのこと私たちの熱意や誠意が審査員や会場の方に届いたことも大きいことである。

## 今後の課題、展望

今後の日本では少子化や高齢化などの社会問題も相まって消滅可能性都市がますます増加していくと考えられる。しかしこれらの社会問題も、学生の柔軟な発想力を活かし、イノベーションとなりうるアイデアを生み出すことができると私たちは思う。私たちの案も、消滅可能性都市化を阻止するのに一歩、近づくことができたのではないだろうか。今回は3つの賞を受賞することができたが、実際にはアプリケーションの詳細な内容や資金調達の方法などに関してはまだまだ詰め切れておらず、現実的ではない部分も多くあるため、実現するには先生やメンターの方からのブラッシュアップやご指導、様々な機関や企業からのご協力が必要である。今後はアプリケーション実現とまではいかずとも、M-BIPを通して得ることのできた経験や繋がりを自分たちの糧とし、これからの学校生活や学外の活動にも積極的に参加していきたい。

最後となりましたが、私たちのM-BIP出場に関し、ご指導くださった川澄先生やメンターの高島様、お手伝いくださった地域連携センターの皆様、並びに応援してくださった皆様、ありがとうございました。



写真 複数賞受賞の様子